

南北スーダン内戦と難民帰還援助

Sudanese Civil War and Aid for Refugee Repatriation

上智大学大学院 グローバルスタディーズ研究科

国際関係論専攻 博士前期課程一年

牧村匠太郎

1、はじめに

アフリカ大陸北東部に位置するスーダン共和国は 1956 年に独立を果たすが、現在に至るまで絶えず武力闘争が続けられている。1981 年より起こった南北間の第二次内戦は 2005 年に包括的和平合意 (CPA, Comprehension Peace Agreement) が結ばれ、スーダン国内には一定の和平を維持していこうという流れが見えてきている。

本稿ではその南北内戦に焦点をあて、現在のスーダン南部の状況はどのようになっているのかを概観するためにスーダン南部の難民帰還をみる。一般に難民は武力紛争が終了し、難民となった発生原因が消失すると、多くが自発的本国帰還を希望する。しかし帰還後の土地は戦火の中で焼失している場合が多く再定着は容易ではない。故に難民の帰還状況を見ることで内戦の終結から帰還地復興の度合いを見ることが出来る。そのため本稿では難民帰還を一つの社会復興の指標として見てみることにする。

また、スーダンではどのような経緯で難民が発生したのか、を本稿の論説として以下より検証してみたいと思う。前述のように、スーダンは 1956 年に独立をするが、1972 年からの一時的な休戦期間はあるものの、独立以降絶えず武力紛争が繰り返されてきた。しかし一般的な対立の構図は多数派のアラブ-イス

ラム系の北部人と、少数派のアフリカ系黒人-キリスト教徒の争いである。そのような単純な二分法では内戦の複雑性を説明することはできない。故に本稿ではスーダンの独立後の内戦を詳しく見ていった上で、スーダン人 (特に難民と関連する南部人) がいかにして差別・周縁化されていったのかを中心にして説明することを試みたいと思う。

そこで本稿は日本国内では栗田禎子や、富田正史、また栗本英世の研究を、また海外ではウッドワード (Peter Woodward) や、イドリス (Amir H. Idris) などの学者の見識を紹介しながら以下で事実関係を整理してみようと思う。また現在のスーダン難民の帰還状況を把握する一助として UNHCR (国連難民高等弁務官事務所) の資料、また (財) アジア福祉教育財団難民事業本部、上智大学の研究チームのスーダン、ケニアにおけるスーダン難民の実地調査報告書を基にして検証してみたいと思う。

2、第一次内戦の開始と終結まで

内戦勃発の要因は、一つにはそれまでのスーダンの国内システムに帰属すると言われているが、それを理解するためにスーダンが国家を形成していった経緯を簡単にまとめておく。

西欧諸国によりアフリカ大陸分割が本格的に開始された 19 世紀後半、アフリカ各地で

は民族独立運動が活発化し、各地で民族自決を求める運動が起こっていた。スーダンもその例外ではなく、元来伝統的な土着運動・イスラーム復興運動として起こった「マフディー運動」がシンボルとして働き、帝国主義への抵抗運動と発展した。さらにアダムス (William Y. Adams) が指摘¹⁾しているように、スーダンはエジプト支配の時より列強の干渉を受け、世界システム²⁾の中に組み込まれていった。その結果スーダン北部人の役割は、開拓の奥地 (南部地域) から搾取したアフリカの商品 (象牙や資源、奴隷など) を供給することであり、北部人は搾取する側、南部人は搾取される側という構図が成立した。換言すれば「核」は北部、「周辺」は南部とし作り上げられた。その構図は現代に至るまで変化はしておらず、スーダンは絶えずそのシステムの中で歴史が刻まれてきた。

元来スーダンには 19 世紀の初頭まで、現在の北部にはフンジュ・王国、西部にはダール・フル・王国が存在していたが、1820 年に位置するエジプトから、ムハンマド・アリー朝が支配を始め、1874 年に征服し「エジプト領スーダン」として支配を開始した。その頃からアラブ系 (北部) が支配者に従い非アラブ系 (南部) の資源を搾取、奴隷狩りなど売買の対象にしていた時期があった。ムハンマド・アリー朝は重税など多くの負荷をスーダン人に強要していたことで、領内の民衆はマフディー (救世主・導かれた者) の出現を待ち望んでいた。さらに 1874 年スエズ運河株式会社の株がイギリスに売却されると、エジプトは「二重管理体制」下におかれ、列強もスーダンの行政に乗り出すようになった³⁾。エジプトでは 1882 年のオラービー革命がきっかけとなり、イギリス占領下に置かれることになる。そのような背景の中、スーダンでは

ムハンマド・アフマドが自らを「マフディー」と宣言し、マフディー運動をスーダン国内で展開していった⁴⁾。

マフディー運動は勢力を拡大し、1885 年 1 月にゴードン将軍を破りマフディー国家を誕生させるが、ムハンマド・アフマドが同年 6 月に病死⁵⁾すると、マフディー派は権力争いの内部抗争へと発展してしまう。結局 1898 年にマフディー国家は滅亡し、翌年「イギリス・エジプト協定」 (Anglo-Egyptian Agreement) により、イギリス・エジプト共同統治の名の下にスーダンは再び列強の支配下に置かれることになった。

支配下に置かれる際に、イギリスはスーダン国内を分断させる方策、「南部政策」⁶⁾をとった。イギリスは反英ナショナリズムが起こっていた北部からアラブの影響が及ばないように南部を保護するという名目で南部を孤立させる政策をとり、南部にキリスト教を普及させた。この南部政策、キリスト教の普及、それに伴う西欧文化の南部流入は、南部人のアイデンティティ強化につながり、2 つのアイデンティティ (アラブ-イスラームとアフリカ-黒人) を対抗させる結果となった⁷⁾。また岡倉 (2001) はこの時代の南部政策では「南部はキリスト教以外に文明の恩恵は施されず」、また「マフディー国家時代にできようとしていた南北の通路がたたれ、多民族からなるスーダン統一国家の形成が断たれた」と記述している。逆に北部では大規模灌漑事業などの経済発展がなされるなど、北部と南部では様々な違い、格差を残したまったく異なった世界のまま 1956 年の独立を迎えることになる⁸⁾。第一次内戦の要因となったのはこのような経済発展の違いによるものとされている。

内戦の直接の要因は 2 点挙げられている。一つは 1955 年 8 月に南部のエクアトリアの

軍が（経済格差の是正から）反乱を起こした
ことである。もう一つの要因はアラブ優勢社
会をスーダンに作り上げた北部スーダン人商
人、ジャッラーバ（jallaba）による奴隷貿易
である。彼らは南部人をアベード（abeed）と蔑
称して北部優勢社会をスーダンに築いていった⁹⁾。

独立二年後の1958年、アブド（Abboud）
政権はそれまでの議会政治に終止符を打ち、
軍事独裁体制に入る。その体制の主要な課題
は南部の問題であった。アブド政権は南部、
ヌバ山地で大規模な農業プロジェクトを
開始し、住民を東部へと追いやった¹⁰⁾。しか
し特に問題としていたのは、いかにして南部
をアラブ化・イスラーム化するかであった¹¹⁾。
そのような政策に対しての南部の不満を記し
ている以下の記述がある。以下は南部の指導
者が北部の圧政によりウガンダなどの隣国に
難民として避難した際に結成した団体、スー
ダンアフリカ閉鎖地域民族同盟（Sudan
African Closed District National Union,
SACDNU）が国際連合（UN）、アフリカ連
合（OAU）に請願した文書である。

生まれながらにして支配者のアラブと、北部
に住む奴隷の南部人、またその子孫。後者は
“自然なもの”としてその劣等性を認めてい
る。この立場こそアラブが南部につくりだそ
うとしていることなのだ。[SACDNU's
Petition to the O. A. U. 16 December, 1963]
（邦語訳は筆者）

このようにアブド政権時代の北部の主要な
関心ごと、また争いの争点は、北部にとってはい
かに南部を同化させるか、であった。しかし一定
したゲリラ活動は1963年まで発生しなかった¹²⁾。
SACDNUは1963年にスーダンアフリカ民族同
盟(SANU, Sudan African National Union)

を結成し、また軍隊アニャニャ（Any-Nya）を
結成し北部に対抗した。このとき SANU は拠点
をウガンダのカンバラに移した。しかし SANU は
アブド政権が倒れるまでの1964年までには
南部自治の目的を破棄し、政府により認められ
るためにスーダンへと拠点を戻した¹³⁾。しかしア
ブド軍政は北の多くの部隊の不満を募り、「10
月革命」によりアブド独裁は倒された。

1965年、南北双方の代表者による円卓会議
が開かれ、南北の問題について話し合われた。
南部は前年の首相への手紙で「連邦制・自決
権（・もしくは選択として分離）」を要求し
ていたが北部はこれらの全てを拒否し、「スー
ダンには連邦制は存在し得ない」とした。円
卓会議は失敗に終わり、その後選挙で首相に
就任したマフジャーブ（Mohammad Ahmad
Mahjoub）は1965年7月8、9日の二日間南
部の都市ジュバにおいて住民ら1400人を虐
殺したとされた¹⁴⁾。マフジャーブのアラブ・
イスラーム優位の政策は明らかで、それに対抗
すべく、内戦は1969年までにエスカレート
していった。

第一次内戦は国際社会の関心をあまり集め
られるものではなかった。しかしイスラエルが、
スーダン政府がアラブ革新陣営と連帯していく
姿勢を見せた¹⁵⁾ことでスーダン内戦に関心を
寄せると、始めはエチオピアを經由して、また
後にはウガンダを經由してアニャニャへの支援
を開始した¹⁶⁾。そんな中で1970年イスラエル
に支援を受けたジョセフ・ラグ（Joseph
Lagu）は南部の全ての軍隊をまとめ、南部
スーダン解放運動（SSLM, Southern Sudan
Liberation Movement）を結成した。1964年に
政権に就いたヌメイリ（Nimeiri）は南部の地
域的な自治を認め、1972年「アディスアベバ平
和協定」（Addis Abeba Agreement）を SSLM
と結び第一次内戦は終結した。

3、第二次内戦終了まで

内戦は財政的・政治的に負担のかかるものであったために、内戦の終結はヌメイリ政権の最優先事項として進められた¹⁷⁾。また停戦後の1973年憲法では南部には地方自治権が与えられたが、さらに大統領に南部への干渉の権利が与えられ、度々ヌメイリは南部へ干渉をしてきた。故に南部はヌメイリ政権の経済発展計画から開発されることがほとんどなく、依然として周縁化されたままであった¹⁸⁾。さらに1978年に南部のベンティウ (Bentiu) 周辺で石油が発見されたことで北部との関係は悪化した。当初石油の発見により、スーダン全体の問題が終結し、スーダンも石油で富を築けるかのように思われた。しかしベンティウは北部との近い位置であったために北部は境界線を改定し、ベンティウを北部に位置するようにした。そのような背景の中で第二次内戦が開始された。

1980年から1983年の間に、ヌメイリ政権は北部のイスラーム政党、ムスリム同胞団 (Muslim Brothers) の支持を得るため、また南部の結束を弱体化させるために1972年の協定を破棄しムスリム同胞団の指導者トゥラービー (Hassan Al-Turabi) と南部を3つに再分割し、イスラーム法シャリーアを適用し、アラビア語を公用語として強要した。このイスラーム法は非ムスリムの全権を否定し、非ムスリムを第二級市民に格下げするものだとされた¹⁹⁾。

そのような原因の中で南部軍は反乱を起こし、エチオピアを拠点とした。反乱軍の始まりは6000人も旧アニャニャの部隊で、ガラン (John Garang) を中心としてスーダン人民解放運動 / 軍 (SPLM/A, Sudan People's Liberation Movement/ Army) が1983年に結成された²⁰⁾。この時期、1980年

代初めはアフリカの角地域が新たな冷戦 (new cold war) の舞台となり、エチオピア、リビアなどはソ連の後ろ盾がついていた。一方アメリカはエジプト、スーダン、そしてケニアなどを支持していた²¹⁾。このような国際関係の中でSPLAはリビアからソビエトの兵器などが供給され、エチオピアにおいて軍事訓練を受けていた²²⁾。

1985年北部でヌメイリ政権の圧政により「インティファード」(民衆蜂起)があり、1986年選挙が実施された。しかしコカ・ダム宣言の不履行、内戦の継続からSPLAは選挙に不参加し²³⁾、結局マフディー (Sadiq al Mahdi) を指導者とするウンマ党が勝利した。さらにこの時期は和平への取り組みも行われた時期で、注目すべきは1989年12月にアメリカのカーター元大統領による取り組みがなされたことである²⁴⁾。

ヌメイリ政権時には多くの市民兵がSPLAと闘うために組織された。初めて出現したのは1983年長くディンカ族と敵対していた同じ南部のムール (Murle) とムンダリ (Mundari) の二民族であった。彼らは政府から支援を受け、ディンカ族を襲った。マフディー政権時はアラブ系民兵が増加し、それらはディンカ族とは歴史的に対抗関係にあった部族が意図的に集められた。攻撃の対象は主に市民で家畜などを略奪した。このような武装民兵の襲撃は1984年から1989年にかけての南部スーダンにおける飢饉の原因になったと言われて²⁵⁾。1988、89年には飢餓により250,000人の南部スーダン人が亡くなったとされ、その多くは女性・子供であった²⁶⁾。そのような飢餓の状況の中で国連主導の「スーダン生命線作戦」(OLS, Operation Lifeline Sudan) が実施され、避難民や戦争被災民などに食糧やその他の物資の援助がなされた。しかしOLSは

1989年から10年間で30億ドル以上の費用を投資されたにも関わらず、10年間で南部の状況はあまり改善されなかった²⁷⁾。何百万という南部スーダン人は自らの土地を追われ、その年約85%の南部スーダン人が強制移動させられたという報告もある²⁸⁾。また、後述のバジール（ウマル・ハサン・アル＝バジール）が政権に就いてまもなくの1989年10月には「民衆防衛隊法」が制定され、アラブ系遊牧民で構成された民衆防衛隊（PDF, Popular Defense Forces）が結成された²⁹⁾。

ただ、マフディー政権時代、特に1989年は国際社会からの関心も集まり、最も和平の機運が高まった時期でもあった。5月にはSPLAは一ヶ月の一方的停戦。6月にはアディスアベバで政府とSPLAの交渉が始まり、その中でイスラーム法の凍結、リビア・エジプトとの軍事協定の廃棄などが話し合われ、平和への期待が高まっていた³⁰⁾。ガランも西ヨーロッパ諸国やアメリカを歴訪し、SPLAの支持を得ようとしていた。しかしSPLAとの和平に反対する軍部の一部と、国民イスラーム戦線（NIF）が首謀した軍事クーデターの結果バジール政権が誕生³¹⁾すると、平和への機運は遠のいてしまう。それ以降イスラーム原理主義勢力（特にNIF）が権力を掌握したことにより、内戦が「ジハード」と規定された³²⁾。それにより内戦は単に反政府勢力を軍事的に敗北させれば良いというのではなく、スーダン南部人のイスラーム化を目指し、一種の「浄化作戦」を展開するようになる³³⁾。

1990年政府は南部人を強制的にスーダンの首都、北部のハルツームへと移動させた。しかし多くの避難民がハルツームへと移ると政府はハルツームでSPLAが結束すること、またハルツームが“汚染”されることを恐れ、“純粋な”アラブ－イスラームの首都が崩れることを

恐れた³⁴⁾。結果として1990年に750,000人の南部スーダン人をハルツームからハルツーム近郊の町へと移住させた。

1991年、3つの出来事が内戦の方向を変えていくことになる。一つはエチオピアのメンギスツ政権が反政府勢力に敗れ、メンギスツに支援を受けていたSPLAがその支持基盤を失ったことである。またスーダン政府に支援を受けたエチオピア人民革命民主戦線（EPRDF, Ethiopian People's Revolutionary Democratic Front）の攻撃によりエチオピアに残留していた南部難民も国境へと追いやられていくことになった³⁵⁾。

もう一つは1991年よりSPLAが内部分裂したことである³⁶⁾。ガランの権威主義的な手法に反対し、SPLAはディンカ人ガランのトリト派と、ヌアー人マチャル（Riak Machar）らのナシル派に分裂した。政府はマチャル派を支援³⁷⁾。またディンカ人とヌアー人は長い間敵対関係にあったためにその戦いも厳しいもので、アニャニャII（Anya-Nya II）³⁸⁾や白軍（武装民兵）も加わり、（南部での）家畜の略奪、大量殺害へと繋がった³⁹⁾。

三つ目は当時の国際関係である。多額の負債と過度のイスラーム原理主義の動きにより、スーダンは国際社会から孤立すると見なされていた⁴⁰⁾。しかし1991年にイランと関係を強化することで、孤立は免れた⁴¹⁾。スーダンはイランから武器、兵力の供給を受けることができたのである。

1992年以降は隣国、国際社会などさまざまなアクターによって和平調停の道が模索され始めていく。第一回、第二回アブジャ会議を経て、旱魃と開発のための政府間権威（IGADD, Inter-Governmental Authority for Drought and Development）（後にIGADに改称）が仲介役を務め、1994年に第一回和平交渉が3月に、第二回が7月に開催された⁴²⁾。しかし

ある⁵⁰⁾。またハルツームと周辺へと逃れた国内避難民の総数は 2001 年までで 250 万人、スーダン全体ではこれまでに 400 万人にのぼると言われている⁵¹⁾。2005 年に包括的和平合意が結ばれたことにより、これらの難民と国内避難民の帰還プロセスが進められることになった。紛争後の二年間は難民と国内避難民の帰還と再定住には重要な期間である⁵²⁾。この期間で今後の持続可能な帰還地での再統合や、移動・避難の再発を防ぐことができる。よってこの期間の支援はベーシックニーズに応じたものであることが望まれ、そしてそれは帰還後の生活の信頼醸成 (confidence-building) や帰還地での住民同士の調和にも連結する。

では実際ケニアの難民キャンプを中心として以下よりスーダン南部難民の状況を述べてみたい。ケニアには長く難民を受け入れてきた歴史を持つ。スーダン難民も前述したようにエチオピアの政変をうけてエチオピアの支持を得られなくなり、また EPRDF からの攻撃を受けることになり、SPLA、南部難民がケニアへと 1992 年に避難してきたのが始まりで、その後多くの数の難民がケニアへと流入することになった。2004 年末までには 67,556 名の難民が避難したが、和平合意が結ばれた後の 2005 年 1 月～8 月の間にも約 6000 人の難民がケニアへと流入している⁵³⁾。和平合意後にも関わらず難民が流入している理由の一つには、帰還後のスーダン国内の状況によるものであると思われる。南部地域は全域が紛争地になったために、インフラストラクチャーの不備、食糧の確保が困難など多くの問題が山積しているために、UNHCR などの国際機関から食糧援助が受けられる難民キャンプへと戻ってくることが予想される⁵⁴⁾。

難民は難民となるに至った「理由」が消失すると一般には難民ではなくなり、帰還をす

ることができる。しかし紛争後の社会復興の遅れなどから、その帰還が中々進まないことがある。また帰還が遅れる理由としては気候の変動などがある。スーダンでは 9 月～10 月の後半まで雨季に入るため帰還事業が行うことができない。そのため UNHCR は、全体で約 4 年間要する⁵⁵⁾としている。2005 年、2 月初めの時点で 20 万人の元難民、40 万人の国内避難民の合計 60 万人が南部に帰還したと推定されている。

また、難民の帰還を妨げる要因としては 200 万発を超えるとされる地雷の残存なども挙げられる⁵⁶⁾。そのため国連地雷対策サービス部 (UNMAS) で帰還地の地雷の集中的な除去が行われ、2005 年 4 月現在では南部の都市ジュバとイエイ間を結ぶ道路の除去は行われた⁵⁷⁾。

復興支援には国連機関の他に、多数の非政府組織 (NGOs) の存在も大きい。南部の都市ではこれらの NGOs の働きにより、水と衛生、女性や青少年の活動、教育の普及なども行われている。簡単に紹介すると、例えばジュバにおいては Sudan Council of Churches や IRC (International Rescue Committee)、ICRC (International Committee of the Red Cross) などの NGOs が活動している。また、ケニアのカクマキャンプにおいても IRC やドイツ技術協力公社 (GTZ) などが国連機関と連携をとりながら活動している。キャンプ内に病院などの医療施設や、学校も多数存在し、南アフリカ大学のカクマキャンパスがキャンプ内に存在することである⁵⁸⁾。難民となると教育の機会から遠ざかり、難民への教育、帰還後の教育は大きな問題であるが、ケニアのカクマキャンプにおいてはキャンプ内にいながら大学までの教育を受けることができる。

このように帰還には帰還地の平和構築も同時必要になってくる。しかしスーダンでは22年間での内戦でインフラが壊滅しており、その復興も容易ではない。ガランは2005年5月のインタビューで以下のように述べた。

インフラ、特に経済インフラが南部では壊滅している。従って我々の最優先事項は（社会復興のために）南部の政府の基盤を築くことである。私が必要なためと思っているのは、10の州の州政府を、また、行政や警察、法の支配を整備することである。…中略…100万もの難民や国内避難民が帰還を開始しているが、しかし国際社会が我々に約束した支援は未だ受け取っておらず、それにより我々は自らの数少ない資源に頼らざるを得ない。このことは社会の安全性を脅かすことに繋がってしまう。[Sudan Tribune, 24 May 2005]（邦語訳は筆者）（ ）は筆者の加筆

5、おわりに

以上まで見てきたように、スーダン南北内戦の中心は北部と南部間での国家のアイデンティティ危機であった⁵⁹⁾。また、その要因が“アラブ化”、“イスラム化”であり、この2つが長い歴史的要因として難民発生へとつながっていた。

難民はイデオロギー戦争やナショナリズムの紛争、また環境災害や貧困、民族的憎悪や権力者の野望などの結果生まれた産物である⁶⁰⁾。スーダン難民はまさにそのような状況の中で生まれた。ここまでスーダン難民がどのようにして発生し、現在までの状況はどうなっているのかを見てきた。しかし現在の状況を詳しく見ていくには現地での調査（実際スーダン国内に入国することは難しく、隣国ケニアなどのキャンプでの調査）が

必要になってくるであろう。南北内戦に関しては多くの学者の研究が進み、大分は検証されていることがわかった。そこから見るとスーダン難民は単純に民族・宗教対立の産物ではなく、長い歴史的な背景に基づく迫害から逃れたのである。換言すれば、スーダン難民は長い南部人の迫害が内的にからみ、その構造はスーダンが「エジプト領スーダン」の時より続いていた。世界システムの構造が現在まで続いていると言っても過言ではないであろう。そして現在は60万人もの難民・国内避難民が帰還しているのに対して、復興の度合いが遅く、持続的な再統合のためには医療や経済インフラ、また行政の整備が最優先事項であり、帰還事業と並行して進めなくてはならない。今後は今回の研究を踏まえ、現地での調査、資料などを行いながら包括的に現状を見ていくことが必要であろう。

注

1) Woodward、1995年、pp92-93

2) これは、ウォーラーステイン (Immanuel Wallerstein) の論で、簡単に述べると、19世紀の世界は英を中心とした「核 (core)」とその「核」に資源などを搾取される「周辺 (periphery)」国家によって構成された世界システムを指す

3) 栗原禎子、1996年、pp144-147

4) マフディー運動の詳しい記述は、栗田 (1996 及び 2000) や大塚 (1995 及び 2004) 等の記述を参照

5) ムハンマド・アフマドの死については色々な説があるが、本稿では病死という記述をしておく

6) 具体策については富田 (1992) p17 を参照

- 7) Francis M. Deng, 2006 年、P156
- 8) 富田正史、2002 年、p8
- 9) 詳しい内容は Southern Sudan Disturbances Report を参照
- 10) 栗田禎子、2001 年、pp379-380
- 11) Idris, op. cit, pp.108-109
- 12) Woodward, op. cit, pp96-97
- 13) Idris, op. cit, pp113-114
- 14) Ibid, p117
- 15) 栗田、前掲書、2001 年、P429
- 16) Woodward, op. cit, p98
- 17) Ibid, pp99-100
- 18) Idris, op. cit, p120
- 19) Ibid, p123
- 20) SPLA はこれまでのような自治権を求める運動とは違い、全ての市民に平等な権利を与える“新しいスーダン”を目指しているもので、南北内戦を、「スーダン全体の問題」と据えていた。
- 21) Woodward, op. cit, p103
- 22) アメリカとエジプトはスーダンの内戦に悩まされていたものの、彼らの支持は間接的にヌメイリ政権の内戦をエスカレートさせる結果となった。
- 23) コカダム宣言は、内戦を「南部」だけではなく「スーダン全体の問題として扱うこと」、1983 年施行のイスラム法の撤廃などが話し合われた。詳しくは栗本、2000 年、p34
- 24) Woodward, op. cit, p105
- 25) Idris, op. cit, p126
- 26) Ibid, pp126-127see also Woodward, op. cit, p103 これは食べ物を与える代わりに北部に忠誠を尽くすことを強要した北部に対して南部が拒否したことが要因であるとされている。
- 27) OLS について詳しくは富田、前掲書、pp99-108
- 28) Idris, op. cit, p127
- 29) 富田、2002 年、p14-15
- 30) 栗本、前掲書、pp365-366
- 31) 栗本、前掲書、p252
- 32) 富田、2002、p14
- 33) 同上 p14
- 34) Idris, op. cit, p128
- 35) Woodward, op. cit, p106 これにより SPLA はケニアとウガンダへの依存を強めていくことになる。
- 36) 富田、前掲書、p16
- 37) トリト、ナシルはそれぞれ南部の都市の名称である。
- 38) アニャニャ II は当初反政府側についていたが、その後政府側につく。ガランの組織した SPLA とは別組織である。
- 39) 同上、p16
- 40) Woodward, op. cit, pp106-107
- 41) イランは自身がアメリカの制裁を受け、国際的にこの時代孤立していたことによりスーダンと関係を深めたとされる。詳しくは富田、前掲書、p140
- 42) 栗本、前掲書 pp371-373
- 43) NDA にはウンマ党や民主統一党 (DUP) またスーダン共産党が加わった。
- 44) 富田、前掲書、pp18-pp20
- 45) 詳しくは、同上 pp20-pp21
- 46) 栗本、前掲書、pp376-377 国連の発表では 220 万人の人々が緊急食糧援助を必要としていたとされる。
- 47) Idris, op. cit, p130
- 48) 上智大学、p50
- 49) (財) アジア福祉教育財団 難民事業本部 現地調査報告書、2005 年、p6 難民 (refugee) と国内避難民 (IDP, Internally Displaced Person) とでは法的な分類上では区別される。大まかな区別で言うと、難民とは国境を越え、政治的に迫害された人々を指すが、国内避難民は迫害の理由が同じでも国境を越えない、超えるこ

とができない人々を指す。本稿ではスーダン南部難民の動向を把握するために難民と国内避難民を区別せずに言葉を使用することにする。

- 50) 難民事業本部による東アフリカ難民調査発表、2006年、p5
- 51) 富田、前掲書、p89
- 52) UNHCR, 2005, p5
- 53) 難民事業本部、2006年、p6
- 54) 同上、p7
- 55) 同上、p9
- 56) 上智大学、p38 上智大学の調査では2006年3月現在スーダン南部においてコレラが流行しているという。しかし医療の不足のため多くの帰還民が放っておかれている。また水も不足し、2日にコップ一杯の水で生活している者もいる。
- 57) 難民事業本部、2005年、p8 及び pp11-13
- 58) 上智大学、p8 及び p55-58
- 59) Deng, op. cit, p155
- 60) Adelman, 1994pIX

参考文献

- 1、大塚和夫「テキストのマフディズム スーダンの土着主義運動とその展開」(中東イスラム世界3) 1995年、東京大学出版会
- 2、——「イスラム主義とは何か」2004年、岩波新書、岩波書店
- 3、岡倉登志「アフリカの歴史—侵略と抵抗の軌跡」2001年、明石書店
- 4、栗田禎子「東アフリカの植民地分割と抵抗—スーダンのマフディー運動とアフリカ「分割」のメカニズム」(岡倉登志編『アフリカ史を学ぶ人のために』)1996年、世界思想社、pp139-163
- 5、——「近代スーダンにおける体制変動と民族形成」2001年、大月書店
- 6、栗本英世(第3節 スーダン)(総合研究

- 開発機構 横田洋三編『アフリカの国内紛争と予防外交』) 2001年、国際書院、pp250-255
- 7、——「継続する内戦と成果のない和平調停—スーダン内戦をめぐるさまざまなアクター—」(武内進一編、『現代アフリカの紛争』第六章) 2000年、日本貿易振興会 アジア経済研究所、pp357-383
- 8、富田正史「スーダンにおける国民統合」1992年、晃洋書房
- 9、——「スーダン—もうひとつの「テロ支援国家」」2002年、第三書館
- 10、(財)アジア福祉教育財団 難民事業本部「スーダン南部地域における国内避難民の状況・支援活動及び難民等の期間予定地」2005年
- 11、上智大学学内共同研究「難民保護の国際比較(2)」、2006年、上智大学学内共同研究班
- 12、Adelman Howard and Sorenson John ed “African Refugees Development Aid and Repatriation” 1994, Westview Press, ppix- x i x
- 13、Idris Amir H. “Sudan’ s Civil War – Slavery, Race and Formational Identities” 2001, The Edwin Mellen Press
- 14、Peter Woodward “SUDAN: War without End” in Oliver Furley ed ‘Conflict in Africa’ 1995、Tauris Academic Studies, pp92-109
- 15、UNHCR “REURN AND REINTEGRATION OF SUDANESE REFUGEES TO SOUTHERN SUDAN” June 2005
- 16、Sudan Tribune, May, 2005
- 17、Francis M. Deng, “Sudan : A Nation in Turbulent Search of Itself” , ANNALS, AAPSS, 603, January, 2006, pp155-162.